

## 1. ラテン語接頭辞 *ad-*に関する語源的綴字の広がり：ラテン語の参照から類推へ

寺澤志帆（慶應義塾大学大学院生）

*doubt* に含まれる<b>や *adventure* の<d>のように、ラテン語からフランス語を経由して英語に借用された語の綴字を、ラテン語の綴字を参照して直したものを一般に語源的綴字と呼ぶ。先行研究によって、語源的綴字は14・15世紀に出現し、16・17世紀に普及した傾向にあることが明らかにされた一方で、語彙によって語源的綴字が普及した時期は異なることも指摘されてきた。しかし、従来の研究では挿入や置き換えに関わる書記素(列)ごとに数語が分析されるに留まっており、より詳細な分析が必要とされる。さらに、*advance* に挿入された<d>のように語源であるラテン語の綴字と一致しない綴字や、*island* に挿入された<s>のようにラテン語を語源としない語における綴字の変化については十分に扱われてこなかった。

したがって、本発表ではラテン語接頭辞 *ad-*に関わる語源的綴字に焦点を当て、15世紀末から17世紀までの印刷本のデータベースである *Early English Books Online - Text Creation Partnership (EEBO TCP)*を用いて、ラテン語の語源を参照した綴字と、ラテン語の語源に沿わない綴字の使用について調査し、各語における普及時期の分析を行う。そして、語彙ごとの普及時期の差や、普及の有無、ラテン語の語源に沿わない綴字の発生の背景について、テキストの著者やジャンルなどの書誌情報を交えて考察する。

## 2. 二人称複数代名詞 *you all* の文法化と語用論標識化について

岩城 凜（名古屋外国語大学学部生）

本発表では、*Corpus of Contemporary American English (COCA)*の *Spoken* セクションから得られた *you all* とその短縮形である *y'all* の全例を分析対象とし、二人称複数代名詞 *you all* の文法化とその語用論標識的な特徴について考察する。文法化の特徴として、I) 音韻・形態変化、II) 意味の漂白、III) 脱範疇化

(deategorialization)を中心に取る。

I) *you all* は他の二人称複数代名詞(e.g. *you, you guys*)よりも使用頻度が高い(Galiano 2020)。使用頻度の高い表現が音韻的・形態的に縮小する変化は文法化によく見られるという記述(Bybee and Thompson 1997)から、*you all* から *y'all* への変化は文法化を示唆するものであると考える。II) *all* との共起(e.g. *all you all*)や部分構造での使用(e.g. *some of y'all*)は、数量詞 *all* の意味が漂泊していることを示す(Galiano 2020)。これらは *you all* よりも *y'all* で多く見られ、*you all* から *y'all* への変化において意味の漂白が進んでいると解釈できる。III) 人称代名詞が呼びかけ語として使用される際には文頭・文中・文末に自由に生起するが(Quirk et al. 1985: 773)、この場合人称代名詞は主語になったり目的語になったりする代名詞本来の性質を失う。本発表では、*you all* よりも *y'all* において呼びかけ語として使用される頻度が高い点について脱範疇化の観点から論じる。

加えて、呼びかけ語として使用される際の *y'all* の特徴(e.g. 音韻的に縮小している、文構造から独立している)が Brinton (2017)の示す語用論標識の特徴と大きく一致することから、本発表では *y'all* が語用論標識化している可能性についても考察する。

### 3. 20 世紀・21 世紀の英語における接続詞 *after* 節内の単純過去と大過去について

服部 勇人 (大阪大学学部生)

Quirk et al. (1985: 196) で述べられているように、過去形で表されるより前の時点を描写する場合であっても、(1)のように特に接続詞 *after* の節内では、大過去 (*had* + 過去分詞形) だけでなく単純過去を使うことができる。

- (1) a. I *ate* my lunch *after* Sandra *had come* back from her shopping.
- b. I *ate* my lunch *after* Sandra *came* back from her shopping.

本研究発表は、このような接続詞 *after* の節内で使われる単純過去と大過去の使用状況について調査する。分析には *the Brown family of corpora* と呼ばれる BLOB Corpus、LOB Corpus、F-LOB Corpus、B-Brown Corpus、Brown Corpus、Frown

Corpus の 6 つの関連するコーパスから得られたデータを用い、20 世紀の英米英語における状況を通時的に比較する。

Declerck (2006: 748) によると、こうした場合の単純過去の使用は、インフォーマルな場面においてより多く見られるという。そこで、COCA (Corpus of Contemporary American English) や BNC (British National Corpus) などの大規模コーパスを用いた 21 世紀の英語を含む共時的な分析も併せて、ジャンル間で単純過去・大過去の使用にどのような差があるかについても調査する。さらに、soon after や long after といった主節と従属節の時間差の長短を表す副詞が after の直前にある場合についての考察も行う。

#### 4. *Data* の「脱複数化」：ラテン・ギリシア複数形の共時的・通時的調査

疋田 海夢 (慶應義塾大学学部生)

本研究が扱うのは、“The new **data** includes adjustment to country population size[...]

 (COCA: 2012, BLOG) の *data* のように、ラテン・ギリシア複数形が本来の複数性を失う言語変化である(「脱複数化」と名付ける)。脱複数化の研究は、筆者の管見の限り、対象語を 7 語に絞り共時的調査のみ行なった Morallo (2022) 以外にほぼ存在しない。本研究は Morallo (2022) を共時的・通時的に拡張し、脱複数化の HOW と WHY に迫る。

共時的調査では、COCA (=Corpus of Contemporary American English) を用いてラテン・ギリシア複数形 41 語を調査し、統語環境を基準に脱複数化しつつある 10 語を同定する (e.g. *data*, *media*, *algae* 等)。そしてこれら 10 語の共通点から、脱複数化のメカニズム (HOW) に寄与する 2 つの先天的条件 (図像性、-s の欠如) と 1 つの後天的条件 (語源的複数形の相対頻度の高さ) を指摘する。

通時的調査では、COHA (=Corpus of Historical American English) を用いて、脱複数化が著しい *data* の使用例 22,777 件すべてを調査し、先の後天的条件の獲得背景 (WHY) を探る。最終的には、その条件がコンピュータ普及時の *data* を含む複合語の出現により整ったことを明らかにする。

また *data* は脱複数化を経て、可算名詞複数扱いから不可算名詞扱いへ変化することを述べ、「*data* の英語史」を提示する。

#### 【主要参考文献】

- Morallo, Audrey B. “Corpus-Based Investigation of SV Concord Patterns of Nouns

with Latin Plural Endings.” *Malaysian Journal of ELT Research*, vol. 19, no. 2, 2022, pp. 97-116.

## 5. ラウンドテーブル「語彙と文字の近代化—対照言語史の観点から—」

田中 牧郎（明治大学）、高田 博行（学習院大学）  
片山 幹生（大阪公立大学）、西山 教行（京都大学）  
家入 葉子（京都大学）、中山 匡美（神奈川大学）  
堀田 隆一（慶應義塾大学）

2022年、ドイツ語史、日本語史、英語史をそれぞれ専門とする高田博行、田中牧郎、堀田隆一の3名が編者となり『言語の標準化を考える—日中英独仏「対照言語史」の試み』（大修館書店）を出版した。そこではフランス語と中国語も加えた5つの言語の標準化の歴史を取り上げ、その歴史を相互に比較対照する「対照言語史」のアプローチを提示した。その後、この出版を受け、日本歴史言語学会の2022年大会で、高田博行、田中牧郎、堀田隆一、彭国躍、西山教行が登壇し「日中英独仏・対照言語史—語彙の近代化をめぐって—」と題するシンポジウムを企画し、5言語における語彙拡充の歴史を比較対照しながら議論した。

このような対照言語史研究を実践する活動の最新版として、2025年4月に刊行予定の『ことばと文字』にて「語彙と文字の近代化」と題する特集が組まれることになっている。この特集には、5言語の歴史に精通する12名の執筆者が寄稿している。本ラウンドテーブルではその執筆者のうち数名が集まり、各論考を紹介しつつ、言語間の比較対照を主とした議論を通じて、対照言語史の実践例をインフォーマルに示す。